

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受検番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立白鷗高等学校附属中学校

1

次の資料A、資料Bを読んで、あとの問題に答えなさい。

(○で囲んだ数字が付いている言葉には、それぞれ資料のあとに〔注〕があります。)

資料A

頭の中に網あみを張るためには、その根本に問題意識が必要だと思いません。

いくら多くの情報に触れたとしても、あとあと頭に残っていくかどうかは、やはり自分の中に問題意識や問いを持っているかどうかにかかっているのです。ただし、それは①大上段に構えた問題意識である必要はなく、自分の関心事であったり、興味を持っていることであっても、かまいません。

もちろん、最初のうちは、きちんとした網かたまりになっているかどうかもわからず、関心事がぼんやりとした塊かたまりとなっている程度かもしれない。しかし、やがて、「どうしたらいいんだろう」とか、「こうしたらおもしろいかもしれない」という好奇心こうきしんや問題意識が芽生えてくると、それに関連する情報が少しずつ頭に引っかけはじめるのです。

問題意識というのは、いわば、情報を引っかけられるためのトゲトゲのようなものです。こちらから情報収集しゅうしゅうに行かなくても、トゲトゲを出したまま、とりあえずぼーっと待っていればいいのです。その状態で、意識的、無意識的に入ってくる情報を頭の中に流していくわけです。

つまり、あまり意識をせずに大量の情報に接して、印象に残っている情報のかたまりを集めればよいのです。

その場合、情報は直接的なものではなく、むしろその問題意識に直接関係ないもののほうがよいこともあります。どんな情報でも接して、頭の中に流してみても、何かピンと来たら、それを頭の中にキープしておくイメージです。

引っかけたものが、あとになってあまりその問題意識の解決に関係がないようだとわかって、忘れてしまってもまったくかまいません。あまりそこにこだわらず、無理して頭に引っかけようとせずに情報を流していけばよいのです。

大切なのは、おもしろいアイデアが見つければいいな、くつつくものがあればうれしいなという感覚です。②四六時中考しりくじちゅうえなくてもいいのです。

こうして情報をたくさん頭の中に流していると、自然に少しずつ、印象に残ったり覚えていることが増えてきて、情報が頭にくっついてきます。そのたびに、網の上に海苔のりが面を広げていくわけです。

③ここが重要なことですが、イノベーションイノベーションや④革かく新的なアイデアというものは、こうした状況じょうきょうのもと、まったく本来の問題意識と関係ないように見えるものがくっついて生まれることが多いのです。⑤二つの物質が混じり合うことで、⑥化学反応を起おこし、別の物質が生まれるイメージです。

その場合、二つのものがそのままくっついて便利な製品やサービス

になる場合もあれば、まったく関係ないように見える二つのものから革新的なアイデアが生まれる場合もあります。

⑥ 後者は、⑦ スティーブ・ジョブズがパーソナルコンピュータの入力装置として、⑧ マウスを初めて採用した。⑨ エピソードが良い例でしょう。もともとマウスという装置は、現在の姿とはまったく別のものでしたし、ジョブズ自身もあつた形で使うものを探していたわけでもなかったようです。ただ、⑩ キーボードではないインターフェイス（入力装置）が必要だとは思っていて、おそらくその問題意識はずっと持ち続けていたはずです。

とはいえ、インターフェイスそのものを探そうとしても、なかなかぴったりにくるものが見つからなかったでしょう。ところが、あるとき偶然のきっかけでそのマウスの技術を知り、「これは自分が思っていた形で使えるかもしれない」とひらめいた。そこで、二つのものが化学反応を起こして、今のマウスができたということだと思えます。

こうした革新的な発見や発明は、結果から見ると、大事なものを探している、そこからようやく宝が見つかったようなイメージなのですが、実は確固とした目的を持って宝探しをしているケースはそう多くありません。

自分なりのトゲトゲを頭の中につくっておいて、あとは情報を流すに任せておけばいいのです。

引っかけたけど、結局だめだったというものが、いくらあってもかまいません。トゲトゲをつくって情報を流し続けていけば、だんだん

と要領がつかめてくるはずですよ。

網を張って情報を流すという発想をするならば、必ずしも最初から問題意識が明確で具体的である必要はありません。むしろ、あまり決めすぎてしまうと網が狭くなってしまふので、引っかかるはずだったおもしろい話が引っかからなかったり、行き止まりになったりしがちです。例えば、フランス料理のシェフが、新しい料理について何かアイデアを考えているとしましょう。そのときに、具体的にどんな料理をつくりたいのか、どういう食材を使いたいかを細かく考えなくてもいいということです。

ぼんやりと「みんなが喜ぶ料理を開発したい」「これまでにない新しい料理をつくりたい」というくらいのほうが、幅広い情報が頭に引っかかりやすくなるのです。

最近の西洋料理の世界では、理科の実験のように料理するのが流行です。おそらく、最初から理科の実験のように料理をしたいと決めていたのではないと思えます。

⑩ 何か斬新な料理はないかと考えていたら、たまたま理科の実験を見て、「こんなふうには料理をしてみるとおもしろいかも」と思いついたのかもしれない。本当にそうだったかどうかは別に、そうした点に新しさが生まれやすいのです。

最初から「新しい素材を使えないか」といった具体的すぎる網を張っていると、かえって小さなアイデアしか出てこないのではと思います。

（柳川範之「東大教授が教える知的に考える練習」による）

〔注〕

- ① 大上段……考え方の視点などを高いところに置くこと。
- ② 四六時中……いつも。昼も夜も。
- ③ イノベーション……生産技術が画期的に新しくなること。
- ④ 革新的……改めて新しくしようとする様子。
- ⑤ 化学反応……物質が反応し、もとと異なる種類の物質を生成する変化。
- ⑥ スタイーブ・ジョブズ……アメリカの会社経営者。
- ⑦ マウス……画面上の矢印を動かして、コンピューターに指示をあたえるための装置。
- ⑧ エピソード……ある人や物事についての、ちょっとした話。
- ⑨ キーボード……ボタン（キー）を押すことで、コンピューターに命令を伝えたり、データを入力したりする装置。
- ⑩ 斬新……とびぬけて新しい様子。

資料B

「問題」は、学問の世界にだけ存在するわけではありません。何気ない日常生活のなかにも「考えるべき問題」は無数に存在しています。たとえば、木からリンゴが落ちるのはごく当たり前の光景ですね。ほとんどの人はそのことに疑問を抱くことはありません。ましてや、そこに重大な問題が隠れているなんて、普通は思わないでしょう。しかし

みなさんもご存知の通り、^⑪ ニュートンはこのありふれた現象をヒントにして「すべてのものはお互いに引き合っている」という仮説を立て、万有引力の法則を発見したと言われています。

実はこの話の真偽は定かではないのですが、身の回りのありふれた現象に大発見の種が隠されていること、^⑬ 逸話としては興味深いものです。

私たちが暮らすこの世界には、まだ多くの謎、誰も取り組んでいない問題が無数にあります。そのなかには、もっともらしい答えが何通りもあったり、逆に本当に答えがあるかどうかすら分からないものも数多くあります。木から落ちるリンゴの例のように、当たり前すぎて何が問題なのか普通の人にはさっぱり分からないことも珍しくありません。人生には、こうしたカタチにすらならない問題未満のものが満ちあふれています。

私たちが日々暮らしているのは、こうした問題未満の物事に囲まれた世界です。ぼんやりしているつもりでも、考える器官である「脳」は休むことを知りません。私たちはいつも無意識のうちに、何かを考えているのです。

それはこのあと食べるランチのメニューのような些細なことかもしれませんし、今朝何気なく読んだ新聞記事への疑問・違和感かもしれません。あるいは昨日の仕事中に起きたトラブルについてということもあるでしょう。これらのなかに、重大な問題の萌芽が隠れている可能性があります。

しかし、こうした思考のほとんどは断片のまま途切れてしまっています。そして糸の切れた凧のように、忘却の彼方に次々と消えていってしまうのです。でも、すべてが消えてしまうわけではありません。誰でも、こうした思考をふと自覚する瞬間があるはずですよ。

「今、私は××について考えていたんだな」

あなたにもきつとこんな体験があるはずですよ。こんなふうに意識された思考は、断片ではなくなり、「まとまった」形を取り始めます。「まとまった」とはいつても、最初は「気になる」「おもしろそう」「どうしてだろう」といった感覚的なものに過ぎないでしょう。でも、これをそのまま放置してはいけません。なぜなら、そこに「問題の種」が潜んでいるからです。

こうした小さなひらめきのなかにこそ、あなたが解決したいこと、取り組みたいことが含まれています。この凧を空に飛ばさないように、糸を手元にたぐり寄せてみましょう。

コツは「自分はいつも何かを考えている」と自覚することです。そして、無意識下から問題の種をひろい上げ、明確な意識を持って考えてみるクセをつけるのです。

そのために、ポケットに入るくらい小さなメモ帳を持ち歩き、思いついたことをメモしておくことが役に立ちます。スマートフォンについている^⑮ノート機能を使うこともできます。

アイデアの種はすぐに解決できることだったり、^⑰他愛もない連想に過ぎないことが多いかもしれません。しかし、この作業を意識的に繰り返す

返すことで自分との対話を促進し、「考える」という行為を身近にすることが出来ます。メモ帳が自分のアイデアを引き出し、育ててくれる役割を果たしてくれるのです。同時に、漠然とした日々の疑問の種をクリアな思考へと変換することができるようになるのです。

(上田正仁「東大物理学者が教える『考える力』の鍛え方

想定外の時代を生き抜くためのヒント」による)

〔注〕

⑪ ニュートン……………十七〜十八世紀に活躍したイギリスの学者。

⑫ 万有引力の法則……………地球上において物体が地球に引き寄せられるだけではなく、この宇宙においては、どこでもすべての物体は、互いに引き寄せる作用をおよぼしあっていると考える。

⑬ 逸話……………ある人に関する、世の中にあまり知られていない話。

⑭ 萌芽……………芽が出ること。物事のはじまり。

⑮ スマートフォン……………パソコンに近い性質をもった携帯電話。

⑯ ノート機能……………スマートフォンに内蔵されている、考えついたことなどをメモする機能。

⑰ 他愛もない……………深い考えがない。

〔問題1〕

資料A

に、頭の中に網を張るためには、その根本に問題意識が必要だと思います。とありますが、筆者がこのように述べる理由を、本文の内容に基づいて、百字以内で分かりやすく説明しなさい。

ただし、一まずめから書き始め、記号（、や。や□）なども字数に数えなさい。

〔問題2〕

資料B

に、私たちが日々暮らしているのは、こうした問題未満の物事に囲まれた世界です。とありますが、それほどのようなことですか。本文の内容に基づいて、百字以内で分かりやすく説明しなさい。

ただし、一まずめから書き始め、記号（、や。や□）なども字数に数えなさい。

〔問題3〕

資料A

と

資料B

の筆者の主張に基づいて、あなたの考えを四百字以上四百五十字以内で具体的に述べなさい。

その際、段落分けを行い、第一段落で「私たちは日常生活の中で何を意識していく必要があるのか」についてまとめ、第二段落以降で「あなたはこれからどのような学校生活を送りたいか」についてまとめなさい。

ただし、段落分けを行う際の書き出しや改行などの空らん、記号（、や。や□）も字数に数えなさい。